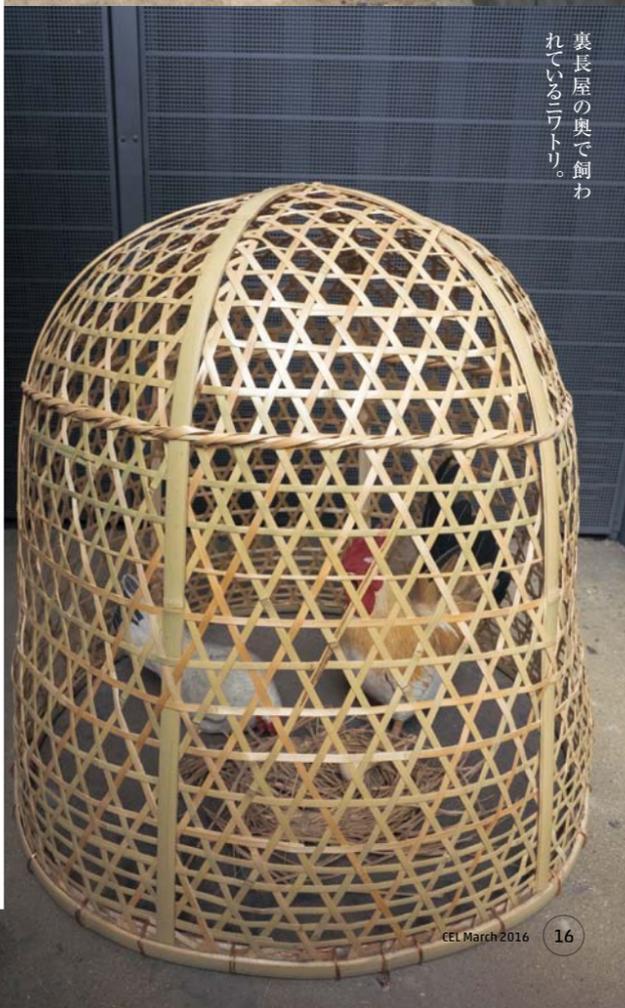




路地裏でたわむれる、大阪くらしの今昔館の名物犬「てん」と「ろく」。館内の動物たちはすべて精巧な置物だ。

裏長屋の奥で飼われているニワトリ。



見て、聞いて、触って楽しむ、住まいと暮らしの博物館

Special Feature The Power of Traditional Life Part 3

町会所前にある用水桶。木造家屋が密集し、火事を最も恐れる町の防火用水として不可欠の共用整備。



重厚感のある唐高麗物屋の軒瓦。



洗濯物をたたいて柔らかくする砵(きぬた)と打盤(うちばん)。



薬屋の玄関庭より火の見櫓を望む。



上／小間物屋の店先に並ぶ化粧道具。台所の戸袋を見上げるとネズミが。



風蝕した木目まで忠実に再現された長屋の外観。



町名が入った掛行燈。



土蔵の窓。幾重もつけた段が閉じると、密閉状態をつくる。

右／通りに大きく突き出した庇をもつ唐高麗物屋。

町会所の屋根にそびえる火の見櫓は館のシンボルの存在。



2001年にオープンした博物館「大阪市立住まいのミュージアム」は、暮らしの知恵の宝庫である。「住まいの歴史と文化」をテーマに再現した江戸期の大坂の町並みを通して、日本の居住文化を伝える意義とは何か。また、博物館が果たす役割、将来の可能性とは――。

取材・執筆／加藤しのぶ
撮影／竹前朗

看板奥に見える白い袖壁は、防火壁の役割を果たす。



ビル内に広がる、 実物大の 昔の暮らし

「大阪くらしの今昔館」の愛称で親しまれる当博物館は、大阪市北区天神橋六丁目一角に建つビル内にある。エレベーターで8階へ上り、入口から誘われるまま最上階へと進むと、展望ロビーにたどり着く。ガラス張りの窓下に広がるのは、江戸時代・天保初年（1830年代前半）の「大坂町三丁目」の町並みだ。天井に届かんばかりの火の見櫓が目を引く表通りには、風呂屋や町会所など人の集う施設や、呉服屋、薬屋、唐物屋といった商家が並び、狭い路地には裏長屋が軒を連ねている。これらが全て、実物大で再現されているのだ。

展示室は、9階が町並みを再現した「なにわ町家の歳時記」、8階は明治・大正・昭和の大阪を模型や資料で再現した「モダン大阪パノラマ遊覧」からなっている。さっと歩き見るだけならば10分とかからない広さではあるが、館内には思わず足を止めて見入ってしまうような「仕掛け」が随所に込められ、訪れる人を楽しませている。

昔の暮らしに焦点を当てた博物館がなぜ今、話題になっているのか。谷直樹館長に館内を案内していただきながら、大阪くらしの今昔館の仕掛けや魅

入口に貼られた「井」の文字は、その奥に緊急時に誰でも使える井戸があるという印——町家衆が実際に操作をしつつ、説明を加えていく。来館者は町家衆の話から、さまざまな興味をもち、隣に並ぶ店に移動した際には自然と細部に目を凝らすようになる。谷館長の狙い通り、入館時にはあかかも映画の舞台を遠くから垣間見ていただけだったのが、いつしかこの町に住む人となつて、先人の知恵を目と耳と手で体感

町家衆イベントのひとつ「楽市町家」では、手作りのおもちゃが並ぶ。



力、また博物館が果たす役割などについてお話をうかがった。

来館者も 町の住民になる

展望ロビーから町並みを眺めている時の視点は「博物館に展示物を見に来た来館者」にすぎない。しかし9階に降り、出迎えてくれる木戸門（町の境界に建てられ、防犯機能を備える木製

の門）から一歩足を踏み入れると、視点は「大坂町三丁目という町を訪れた人」に変わる。

「来館者には町の住民になってもらおうと考えています。この町にやってきた訪問者や、そういった人を遠巻きに眺める一般の人という役割でもいい。何らかの形で町並みに入ってもらおう。そのためにも、ここでは禁止事項はほとんどありません。復元されている建物や展示品にも自由に触れてください、



庇を走る2匹のネコ。
館内いたる所に多様な動物の姿が見られ動物探しも楽しめる。



展望ロビーより俯瞰する表通り。
館内は一定時間毎に、音と光と映像を駆使し朝から夜の一日の変化が演出される。



特集／昔の暮らし力

Special Feature / The Power of Traditional Life

していることに気づく。これらが来館者の心をつかみ、来館者数は年々増加、昨年度は36万人が訪れた。殊にこの数年でその数は2倍に増えた。

近年の来館者増に一役買っているのは、韓国、中国、台湾からの観光客だという。館内どこで写真を撮っても絵になるとブログ等に紹介され、ブームに火が付いた。しかし、絵になる写真が自由に撮れるだけが人気の理由では

ない。アジア圏の旅行者にとってはここが、母国と同様に木と紙と土の文化をもち、母国にも確かにあった古き良き時代の暮らしの姿が感じとれる場であるからなのである。

100年後には 貴重な文化財

「昔の暮らし」の実感を支えるのは、徹底的にこだわったハード（設備）面だ。



大阪くらしの今昔館館長 Tani Naoki

谷直樹

「昔のよさを改めて見直すことで、これからの考える重要な視点が生まれます」

写真も撮ってくださいと言っています」と谷館長は笑う。

復元された町並みに置かれている展示物で、ガラスケースに収まっているものは、ただのひともない。竈に据えられた釜を実際に持ち上げて「重い」と唸る人、町会所の庭の手水鉢をなでる人、町家の中に入り込む人までさまざま。いたる所で記念写真が撮られ、会話が弾んでいる。

展示品を遠巻きに眺める来館者に「どうぞ触ってみてください」「これ、どういう意味かわかりますか？」などと積極的に声をかけるのは、「町家衆」と呼ばれるボランティアの人々だ。台格子（作りつけの格子）や、その前にある「揚げ見世」「ぼったり床几」などと呼ばれる、跳ねあげて出し入れする床几の仕組み、店の外と内からの格子戸の見え方の違い、町会所隣の路地

館のオープン当初、莫大な予算を投じてまがい物を作ったという批判もあったそうだが、「そうではない」と谷館長は力強く答える。大坂町三丁目という町名は架空のものだが、町並みの復元にあたっては現存している町家の遺構や、江戸期の町家絵図、明治期の集合住宅に関する資料などを徹底的に分析した。また実際の工事は、桂離宮の修理にも携わった数寄屋大工に依頼するなど「昔のまま」にこだわった。

「当時の町家は材木の接合に金具を使わず、2本の部材を長さ方向につなげる継ぎ手や、直角などある角度で接合する『仕口』を作って組み合わせます。板扉には日本古来の角形断面をもつ和釘、木部の彩色はベンガラを用い、土壁は下地も当時の工程通りに作るなど、いずれも建物が建ってしまえば見えなくなる細部にまで手を抜かずこだわって、当時の大坂の町並みを再現しています。ですから、この町家が100年後まで残っていれば、町家自体が平成の大工技術を示す文化財になると思っています」

しかし、当時の資料に忠実に作られた本物の町家とはいえ、新築のままでと時代色や生活感に乏しくなってしまう。

「そうした古びを出すために、松竹映画の美術監督にお願いしてエイジングという演出を施してもらいました」とたとえば、町並みの中央に大店を構

える唐高麗物屋。築100年という設定にあわせて、屋根や庇をたわませたり、壁を一部剝落させている。大黒柱が黒光りしているのは、昔の人は乾拭きで床や柱を磨いていたという暮らしぶりを反映したものの。曖昧な「らしさ」ではなく、当時の生活のなかで必然的に生まれてきた古びや経年変化にまでこだわった。当時の生活感を出すために、裏長屋の屋根からの雨だれでできた土のくぼみまで作っているのだ。展示物も作り物ではなく、全部当時の資料に見られるものと同じ品を探して入手したものとすれば、見所は尽きない。おかげで大坂町三丁目には、現代にありながら当時の息遣いが聞こえるような町並みとなったのである。

生きた町並みをつくる ボランティア集団 「町家衆」

昔の実感ある町並みに活気をもたらすソフト面の最大の仕掛けは、前述した「町家衆」と呼ばれるボランティア



西多鶴雄さん。その手から作りだされるおもちゃに目を輝かせる子どもたちに、遊び方も丁寧に教えている。



北野文代さん。英語力を生かし外国人観光客を案内する。現在、急増する韓国語も勉強中。



奥田千尋さん。生きた「昔の暮らし」を伝えるために、建物や展示品を使ったさまざまな仕組みを考えている。

の存在だ。現在40〜80代の180人ほどが町家衆に登録し、一日平均10人ほどの活動が何よりの原動力になっている」と太鼓判を押す。

「町家衆の方々には、本人の都合にあわせ、好きな日時に来てもらっています。開館当時から来てくださっている方も何人かおられます。こちらから作業内容を指示するのではなく、その人が得意とすることを自由にやっていたいでいます」

開館時よりの町家衆のひとり、西多鶴雄さんは、町家衆では最高齢の84歳だ。市内の小学3年生を対象にした体験学習や、手作りのおもちゃを使った遊びなどを通して、昔の暮らしを伝える町並みが好きで、ここの風景になりたいから「だと笑う。

西さん同様、開館当初から町家衆を続けている北野文代さんは、「ようこそ私たちの町へ」という気持ちで、毎週日曜日に行われる町家ツアーの案内をするという。たとえば、葉屋の通り

土間につくられた竈や走り（流し）を指して「今のシステムキッチンと同じでしょう」とわかりやすい例を出したり、本屋では現代の書店の本の並べ方とどう違うかを考えてもらったうえで「和紙は柔らかいから、当時の本は平積みになっている」と説明する。「昔を知るといことは、今を知るといこと。200年前にはこのような暮らしがあったのだと知ること、今の生活のありがたさを実感する手掛かりになれば」と語る。

小学校教員をしていた奥田千尋さんは、昔の暮らしを子どもたちに伝えたいと町家衆に参加した。団子や組紐などのワークショップを開催したり、小学5、6年生に、自分で町並みのガイドをさせる「町並み探偵団」などの活動に取り組んでいる。「子どもたちに説明すると「昔の人は頭を使ってるんやなあ」という反応が返ってきます。昔の暮らしをただ不便なばかりではなく、さまざまな工夫がされていると考えることで新たな気づきのきっかけになればと思っています」

見所満載の館内。
まずは町並みを一通り歩いてから
細部を見て回るのがお勧めだ。



葉屋の通り土間。竈は「へっついさん」の呼称で親しまれる。



葉屋の座敷と縁。建具を開け放つと表通りまで見渡せる。撮影/京極 寛



路地裏にある共同井戸の所在を示す「井」の字。



陰暦10月の誓文(せいもん)払い(大売出し)の情景。



町会所の座敷。町内の寄合などが開かれる。撮影/京極 寛



本屋の店先には浮世絵がずらり。当時の本屋は版元も兼ねていた。



櫛、簪(かんざし)や帯締、帯揚など女性用装身具が並ぶ小間物屋。

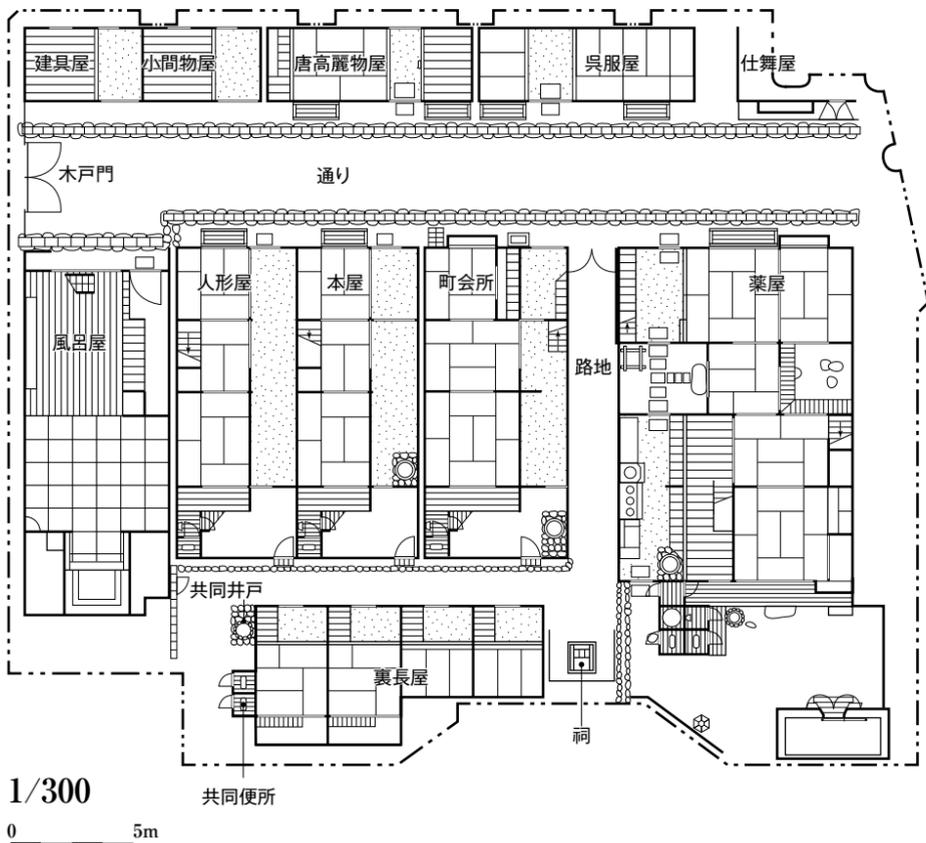
ここでは、博物館という場で、町家衆を核とした新たな形のコミュニティが発生しているといえよう。

博物館がつなぐ、 昔の暮らしからの 提案

谷館長に、大阪くらしの今昔館の今後の展望についてお話をうかがうと、まず、「急増する外国人観光客に、もう少し深いところまで日本の暮らしの文化を知ってもらえる取り組みをどう作るか」を挙げた。そのような仕組みができれば、外国人だけではなく日本人にとっても、自国の居住文化の豊かさを再認識する機会となるだろう。さらに博物館の果たす役割についてはこう語る。

「日本では江戸時代にすでに成熟したコミュニティがあったということ、さちんと伝えたいと考えています。さらに木造建築のよさ、解体して部分補修ができるという利点を、今一度見直す時期に来ていると思います。昔のよさを改めて見直すことで、これからの考える重要な視点が生まれます。それは、ひいては持続可能な社会をつくることにつながっていくと思います」

博物館とは単に「昔」あったものを陳列するだけの場所ではなく、過去と未来をつなぐ重要な架け橋なのである。



復元した 大坂町三丁目の 町家連続平面図

通りを挟み両側に町家が並ぶ。町会所脇の路地を抜けると裏長屋が並ぶ。

